20 佐々コレクション (ユスリカ) の現状.

小林 貞 (環境福祉研究所), The present condition of Sasa Collection (Chironomidae), Kobayashi, T.

日本のユスリカ学は、徳永雅明 (1903-1998) によって始められた。徳永は、224 種の新種を記載した。1960-70 年代の経済成長に伴った急激な環境悪化、水質汚染の問題から、70 年代、国立環境研究所副所長であった佐々学 (後に所長) は、ユスリカに注目し、分類学を含めてその水質指標性、アレレルゲン性、不快昆虫としての問題など、精力的で広範な研究を展開させてきた。現在、日本で記載・記録されているユスリカは約 1,500 種ほどと考えられるが、そのうち 1,071 種は佐々によって新種記載されたものである。

佐々の標本 (すべてスライド標本) 約 45,000 枚 (スライドボックス約 500 箱) は、2000 年 9 月に環境福祉研究所 (黒部市) から、国立環境研究所に移管されたが、一部標本のガラス表面にカビがひどく、保管に問題があったので、2003 年 2 月に東京の業者により薰蒸が行われた後、国立科学博物館新宿分館に移管された。その後、演者により、タイプを中心とした調査・整備が行われている。今後の利用、活用が期待される。

佐々コレクションの移管・整備にあたり、TAF (淡水動物分類研究会) の助成を受けたので、ここに謝意を表す。

22 プロピオン酸ゲラニルのヒョウヒダニ誘引トラップとしての有効性に関する基礎および実地による評価.

○橋本知幸¹⁾, 吉川新²⁾, 田中生男¹⁾, 内田明彦²⁾, 川上泰²⁾ (¹⁾ 日本環境衛生センター, ²⁾ 麻布大学). The attractant effect of geranyl propionate for monitoring the population density of pyroglyphid mite in house dust. Hashimoto, T., Yoshikawa, A., Tanaka, I., Uchida, A. and Kawakami, Y.

プロピオン酸ゲラニル (GP) を用いたヒョウヒダニに対する簡易誘引トラップを作製し、その有効性を基礎および実地試験により評価した。

基礎試験では粘着テープ (10×10mm) に GP アセトン希釈液 (10 μL) を滴下して、生ダニ密度を調整したダニ培地 (100 匹/100mg) から 10cm の距離に配置し、24 時間後の捕獲数を見た。その結果、ヒョウヒダニ 2 種間で誘引効果に差が見られたものの、0.1% (w/v) 以上の濃度で、培地中の 20% 以上のダニを誘引捕獲する効果が認められた。培地からトラップまでの距離、培地中の生ダニ密度、配置日数を変化させた場合、それぞれ、距離、ダニ密度、配置日数に依存して捕獲数が変動した。

実地試験では、この誘引トラップを人の居住環境のカーペット、畳、フローリング、寝具の間、押入れ等に配置し、捕獲数の違いを見た。むき出しのフローリングでは捕獲数が少なかったが、それ以外の材料では家屋によって、捕獲状況は異なった。

この誘引トラップは作製と設置が容易であり、実体顕微鏡以外には、ダニ分離操作の必要がない。また、屋内塵中の最優占種であるヒョウヒダニ類の生ダニ数をチェックできることから、従来のダニ分離法とは異なる視点から、定量的なヒョウヒダニ類生息密度の判定が可能で、有用性の高い方法であると判断された。

21 キチマダニの新世代成虫の夏の活動、特に行動休眠と関連して.

藤本和義 (埼玉医大、短大)

The summer activity of the new generation of *Haemaphysalis flava* adults, with special reference to behavioral diapause. Fujimoto, K.

キチマダニ成虫は年間を通して植生上に出現するが、夏に激減する。これは前発育期である若虫の活動からは説明できない。おそらく春から夏に発育する新世代成虫の活動が関係すると思われる。そこで初夏に屋外で脱皮した新世代成虫の活動を屋外に置いたプラスチック円筒内で観察した。また夏と秋に野外から採集した成虫の活動もプラスチック円筒内で観察した。その結果、春から夏に発育する新世代成虫は脱皮後すぐには活動しないで、秋になって活動を開始することが明らかとなった。夏と秋に野外採集した成虫の活動から判断して、夏に植生上で見られる成虫はすべて旧世代の成虫 (おそらく前年の春から夏に発育した成虫) であると考えられた。

一方、新世代成虫の夏の不活動は行動休眠によると考えられたので、秋における成虫の休眠覚醒についても調べてみた。マダニ類の休眠は一般に日長の影響を受けることが知られている。そこで 12L-12D と 16L-8D の日長で処理した成虫の秋の活動をプラスチック円筒内で比較してみた。その結果、両者の活動には大きな違いはみられず、両者ともプラスチック円筒内で活発な活動を示した。これは両者とも室内条件下で休眠が覚醒していたことを示唆する。16L-8D、25℃の室内条件下で飼育した成虫は脱皮後の経過日数に伴って宿主ウサギへの吸血活動が活発化した。したがって新世代成虫の休眠の覚醒は脱皮後の経過日数に伴って徐々に起こるのかも知れない。異なる日長条件下に置かれた成虫のプラスチック円筒内での活動から判断して、秋の日長は休眠の覚醒には直接関係しないように思われる。今後温度の変化が休眠の覚醒にどのような影響を及ぼすか検討する必要がある。

23 ねずみ駆除対策における取り組みと課題

○伊達 千晶 (川崎市中原区役所保健福祉センター衛生課)

Measures and perspectives on rats control. Date, C.

ねずみ被害相談の増加は、都市環境や生活様式の変化が大きき要因であるが、これを実感した事例について報告する。併せて、相談業務充実に向けた取り組みと課題について報告する。

【事例】歩道橋下のごみ集積所でドブネズミが大量発生した。周囲は開発地域であり、生息に適した条件のほか、不法投棄や路上生活者の存在も住民の不安を高め、苦情は続発した。

町内会や行政機関への情報提供と調査を兼ねた捕獲、そして、集積所移転と巣穴を埋める工事により、発生は約 4 ヶ月もの期間を要して一応の終息を迎えた。本事例は、行政対応における課題とともに、コミュニティの希薄化により、問題解決が困難となっている時勢を感じさせる事例となった。

【相談業務の取り組み】相談者の解決意識と「総合防除」への理解を高めるため、セルフチェックシート (SCS) による指導を試みた。相談者の多くは、生態や総合防除への認識が低く、殺虫剤への期待が高いが効果的な使用に至っていない。また、被害の長期化は、疲弊と意識低下を招き、行動変容に結びつきにくく、さらに家族等で問題共有されないために心的負担が増大している例もみられた。高齢者世帯に関する介護関係者等からの相談も多く、その支援のあり方も問われている。

【課題】衛生動物対策は、動物由来感染症対策の一環としても重要であり、大きな転換期を迎えている。衛生動物を取り巻く環境とともに、市民の認識も大きく変化している中、行政が担う役割等について見出された課題を集約する。

- 1 平常時対策の強化と「総合防除」の普及
- 2 公共発生源対策の確立
- 3 職員の研鑽・業務の連携
- 4 相談業務の充実
- 5 地域情報の還元